

7 / 5 『神の栄冠を目指して』（ピリピ 3:10~16）

長谷川 望牧師

- * スポーツはエキサイティングである。古代ギリシャではスポーツが盛んであった。信仰生活もエキサイティングである。パウロはピリピのキリスト信徒に競技者になぞらえて信仰生活のことを語る。
- * スタートラインに立つことができる競技者は厳しい予選を突破してきた者だけである。しかし、私たちが信仰生活のスタートラインに立つことができるのは、自分の力で競争を勝ち抜いたわけではなく、神様が選んでくださったのである。
- * 号砲一発競技者は走り出すが、ゴールは 200 メートル先なのか、42 キロ先なのか、最初から決まっている。一心にそこに向かっていく。私たちクリスチャンのゴールは何か。パウロは言う。「**どうにかして、死者の中からの復活に達したいのです。**」（ピリピ 3：11）私たちは「復活」に向かって、言い換えれば「救いの完成」向かって走り出したのである。「朽ちないからだへの復活」が私たちのゴールなのである。
- * 私たちはすでにゴールのテープを切ったのではない。信じたからすでに完全にされたのでもない。ゴールを目指して走っているのである。（ピリピ 3：12）。救われて永遠のいのちを約束されているのだから、自由な、自堕落な生活を送ってもよいと勘違いしてはならない。そんな考えだと終わりの日に主イエスの前に立った時、主が何と言われるか、心配である。
- * 「**うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み**」（3：13）イエス・キリストを知って救われる前に戻らないように。この世の富や快樂にゆだねて暗闇を歩いていた時を振り返らないように。エジプトを脱出したイスラエルの民が食べ物に困窮したときにエジプトに帰りたいたと不平不満を噴出させた時の様にならないように。誘惑はついて回る。ただゴールの一点を見て走ろう。
- * 「**私たちはすでに達しているところを基準として、進むべきです。**」（3：16）クリスチャンの霊的状況は人によって異なる。だから、人と比較して一喜一憂してはならない。心が乱れるだけである。今自分はどのような神様との関係にあるかの一点に関心を持って前に進んで行かねばならない。私たちがゴールに向かって一心に走り続けるならば、主は祝福してくださる、必ず「勝利の栄冠」、「義の栄冠」を私にかぶせてくださる。